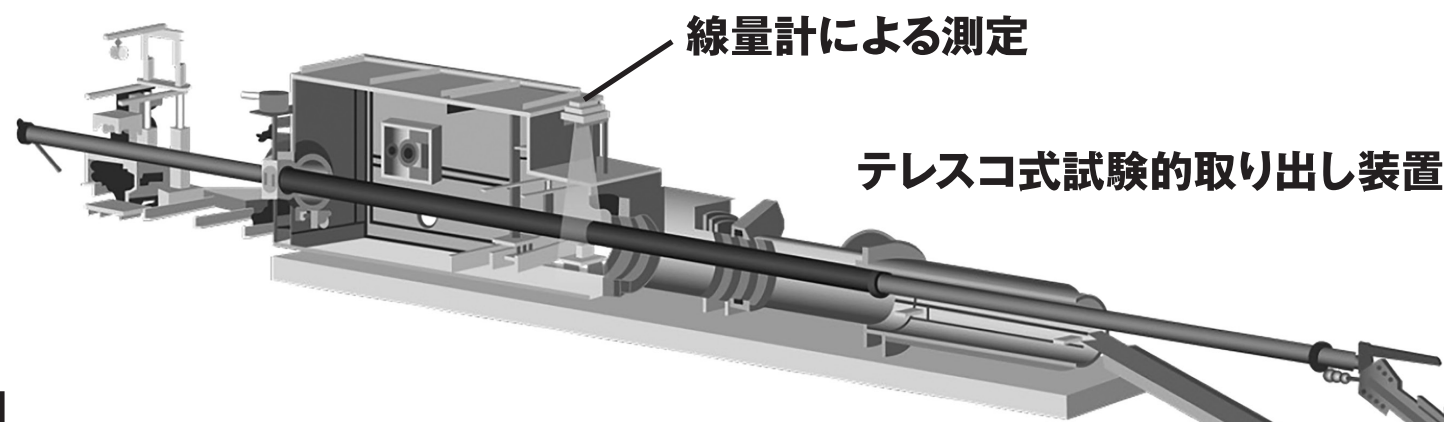
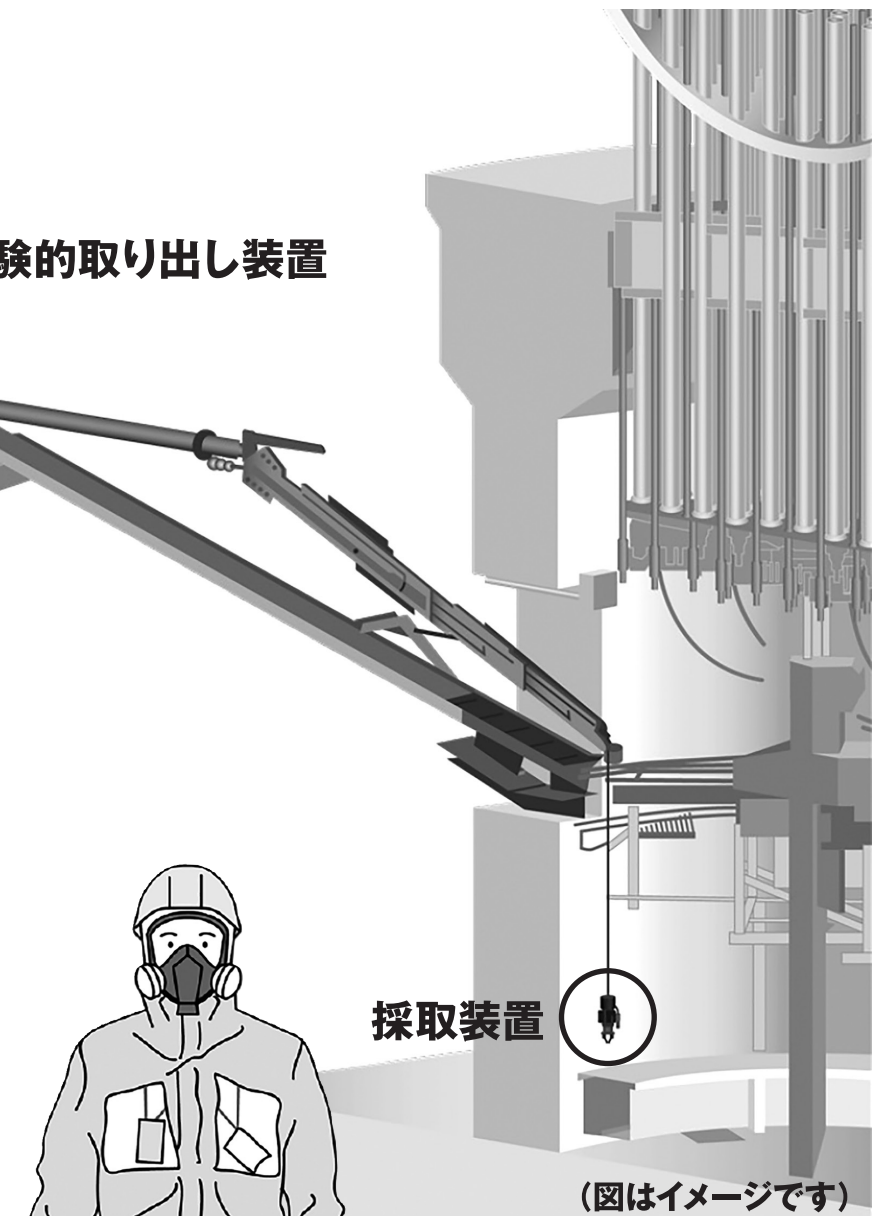
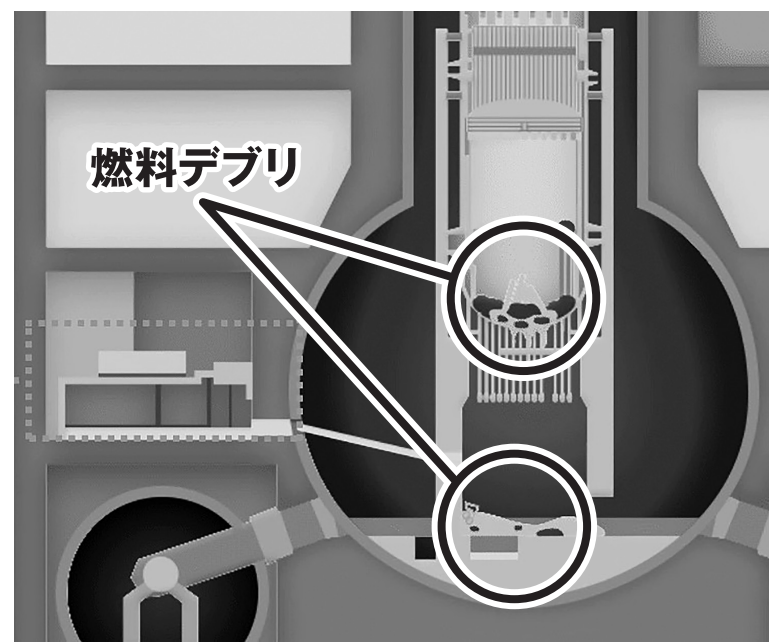


福島第一原子力発電所の放射線リスク低減に向けた、事故後はじめてとなる「燃料デブリ^{※1}試験的取り出し作業」を完了しましたので、ご報告いたします。

試験的取り出し作業では、原子炉格納容器の貫通孔から「テレスコ式^{※2}試験的取り出し装置」を進入させ、先端の採取装置で「燃料デブリ」をつかみました。その「燃料デブリ」の放射線量率を線量計で測定し、安全に回収するための判断基準^{※3}を満たしていることを確認しました。そして、回収した「燃料デブリ」を運搬容器へ収納し、作業を完了しました。(2024年11月7日)



2号機 原子炉格納容器の断面図



(図はイメージです)

作業にあたっては、準備段階の最終チェックで事前の計画と異なっていたことや、装置先端のカメラ映像が遠隔操作室に送られてこないことにより、一時作業を中断しましたが、復旧作業を行った上で、作業を再開しました。

燃料デブリ取り出し作業は、「原子炉格納容器の中が非常に高線量であり、人が入ることができない」、そして「原子炉建屋の中が高線量になるため、長時間の作業ができない」等の『過酷な環境での作業』となることから引き続き、安全最優先で慎重・着実に取り組んでまいります。

- ※1: 事故の際、原子炉内の燃料が溶け、周囲の構造物と混ざりながら、冷えて固まったもの
- ※2: テレスコピックの略称、大きさが異なる筒を組み合わせた伸び縮みが可能な構造のアーム
- ※3: 燃料デブリから20cm離れた位置で24mSv/h以下



採取した燃料デブリは、性質や状態の分析を行うため気密性の高い輸送容器に格納し茨城県内の日本原子力研究開発機構(JAEA)研究施設に輸送しました。(2024年11月12日)

試験的取り出しの分析では、主に燃料デブリの組成に着目した分析を実施し、後の燃料デブリ取り出し工程において「臨界に至らないこと」や「作業員の方々の被ばく」等の検討に活用します。

また、今後取り出す「燃料デブリ」についても分析の取り組みを継続し、「燃料デブリ取り出し工法」や「安全対策」、「保管方法の検討」等に活用します。

一連の作業前後で、モニタリングポスト/ダストモニタのデータに有意な変動はなく、周辺環境への放射線影響は発生しておりません。